義を認める意志にあります。さらに、私たち自身の歴史を超えた複数の歴史の存在と、それらを結びつける共通の糸の存在を認めることに、救済の源はあります。それらを受け入れたときに、おそらく私たちはより公正な解決を達成することができるのです。そのとき私たちは、絶対的であるのではなく平凡であろうとするでしょうし、また、ユダヤ人にとっての唯一の希望とは、あるシオニストがだいぶ昔に言ったように故郷で穏やかに死ぬことにではなく、故郷で穏やかに生きることにあるのだ、ということをようやく理解するようになるでしょう。

最後に作家イレーナ・クレプフィスの言葉を引用して、この話を終えたいと思います。彼女の父親は、彼女とその母親をワルシャワ・ゲットーからこっそりと逃がすことに成功し、その後、彼自身はゲットー蜂起で亡くなりました。

私がたどり着いた答え、それは、闘い、抵抗し、そして亡くなった、私たちの愛するこれらの者たちを哀悼する一つのやり方とは、彼らの同胞の日常生活が破壊されたときに、それを眼前にした彼らの見方や彼らの怒りを私たちが決して手放さないということだった。私たちが日常生活のなかでつつがなく生き続けることを可能にするために必要なのは、この怒りなのだ。その怒りを、ユダヤ人の情況であれユダヤ人以外の者たちの情況であれ当てはめることなのだ。公共生活が崩壊する、そのどんな兆しでも目にしたならば、私たち

の行動と洞察を活性化するために私たちが呼びおこすべきは、この怒りなのだ。射殺された十代の若者の死を嘆く母親の狂乱。滅茶苦茶にされた家、あるいは破壊された家の前で茫然と立ちすくむ家族。分断され追放された家族の姿。恣意的で不当な法律が商店の開閉時刻や学校の始業終業時刻を命じること。文化が自分たちとは異質であることを劣等性の証拠とみなしてその人びとを辱めること。市民権もなく、路上に放り出された人びと。軍の統制下で生きる人びと。これらの悪が平和の障碍であることを私たちは身をもって知っている。こうした情況を認めたならば、そのときこそ私たちは過去を想起し、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人たちを鼓舞したあの怒りと同じものを抱き、その怒りが現在の闘いへと私たちを導くようにするのだ。[*32]

したがって、私たちは亡くなった人びとを想起しなければならないのですが、それは、彼らの死をたんに記憶しておくためではありません。そうではなく、パレスチナ人とユダヤ人両方の日常生活を肯定することによって、彼らの生を讃えるためでもあるのです。それゆえこれが、エドワードが言ったように別の夢を見る可能性を生み出す、私なりのオルターナティヴなヴィジョンなのであり、そこでは、最後にまたT・S・エリオットを引用すると、「火と薔薇とは一つ」[*33]なのです。

ホロコーストからガザへ

パレスチナの政治経済学

サラ・ロイ Sara Roy

岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀 編訳

戸塚 ☎862-9411
横浜市立図書館
2043764252

青土社